

## 消滅した〈教皇のユダヤ人〉

### —アルマン・リュネルのユダヤ人意識の基層—

田所 光男

フランスにおけるユダヤ人意識を考察しようとする、特定の個人を対象にする場合でさえ、歴史的及び地理的な条件を共有する複数の集団の輪郭線が浮かび上がってくる。東ヨーロッパから 19 世紀後半以降に流入したグループと、北アフリカから 20 世紀後半に移住したグループは、基調文化として、一方はイディッシュ文化、他方はアラブ＝ユダヤ文化を有し、また、一方はポグロムやショアーの中で、他方は、植民地独立闘争の中で深い傷を負っていることなど、公分母に重要な違いがある。現代のこうした二大グループの間であって目立たないが、彼らより長くフランス本土に根を下ろし、1789 年の革命と、それに続く 19 世紀における同化過程をフランス内部で生きたユダヤ人集団もいくつかあり、その一つが、「フランスのユダヤ人の最も古い層を代表する、コンタ・ヴネサン、プロヴァンス、ラングドックの共同体」(*Iancu Armand Lunel et les Juifs du Midi* I)である。

1926 年、『ニコラ・ペッカヴィーカルパントラのドレフュス事件—』で、第 1 回ルノー賞を受賞したアルマン・リュネル (1892-1977) は、この作品以外にもたくさんの小説を発表し、ダリユス・ミヨーのためにオペラの台本を書き、また歴史研究も行うなど、多様な分野で著作活動を行っているが、生涯にわたり、フランス南部のユダヤ人グループへの帰属意識を表明し続けたユダヤ人である。リュネルにとっても、ショアーの悲劇とイスラエル国家の創設は同時代の事件であり、それらは彼のユダヤ人意識に深い痕跡を残している。しかし、

若年期にそうした事件を経験した、例えば、ピエール・ゴールドマンやアラン・フィンキェルクロート等の戦後世代とは異なり、リュネルのユダヤ人意識の基層はそれ以前に構成されており、南仏の、すでに消滅してしまったユダヤ社会の記憶に深く結びついたものになっている。20世紀の前代未聞の大事件も、この基層の上に受け入れられたのであり、アクチュアリティがどれほど激しい衝撃をもたらしたとしても、遠い過去の再発見、とりわけそれに直接連なる人々との一種の和解によって構成された深層は、アルマン・リュネルの創造力を生み出す源泉となっていると思う。

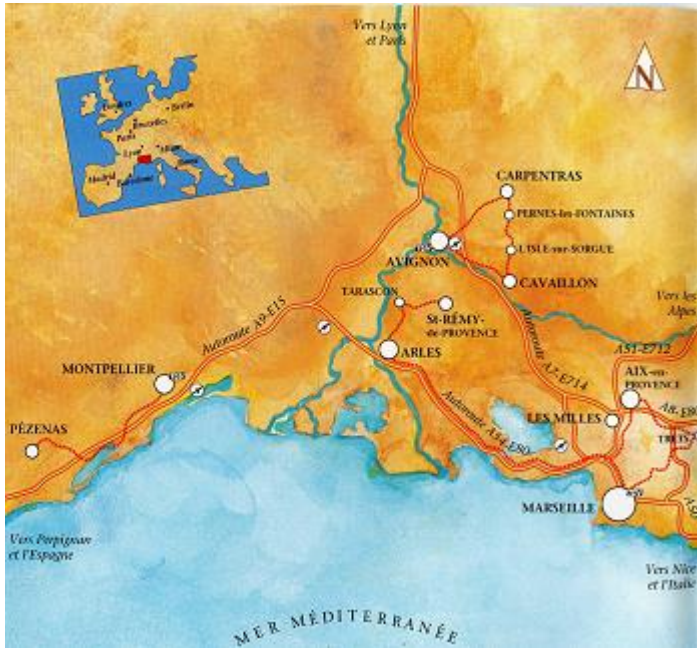
本稿は、アルマン・リュネルのそうした特異なユダヤ人意識を考察するための予備的検討として、その基層に結び付く〈教皇のユダヤ人〉と呼ばれるグループの歴史的、文化的な特徴を理解しようとする試みである。

### 1. 〈解放〉前の南仏のユダヤ人

1394年にフランス国王シャルル6世の発布したユダヤ人追放令はその後廃止されてはいなかったため、1789年の時点で国内にユダヤ人は合法的には存在していないはずであった。しかしいろいろな理由から現実にはかなりの数が居住しており、人権宣言の原則に則り、徐々に市民権がユダヤ人住民にも認められていった。いわゆるユダヤ人〈解放〉である。この18世紀末の出来事が、差別・排斥から平等・同化へとユダヤ人の境遇を大きく変化させる決定的な転回点となったことはよく知られている。〈ポルトガル民族〉と呼ばれていた、ボルドーのユダヤ人がまず〈解放〉され、それに続いたのが、アヴィニョンとコンタ・ヴネサンのユダヤ人であった。ここは長くローマ教皇領であり、革命時にフランスに編入されたばかりの土地であったが、以前からずっとユダヤ人は居住を許されてきた。ボルドーのユダヤ人のように〈新キリスト教徒〉や〈マラーノ〉というレッテルの下ではなく、ここでは〈ユダヤ人〉として生きてきたのである。

フランス国王の追放令に象徴されるように、中世期、ユダヤ人は迫害を頻繁に受けていた。近代とは比べようもない力を保持していたキリスト教会も、よく知られているように、王権と同じようにユダヤ人差別に関わっている。しかし後で詳しく取り上げるが、教皇はユダヤ人を庇護し、ラングドック、ドフィネ、プロヴァンスなど南部地域が次々とフランス王国の版図に組み入れられていく中で、つまり、ユダヤ人が次々と追放を余儀なくされる中で、その重要な

避難先として選ばれたのがこの教皇領であった。<sup>1)</sup> とりわけアヴィニョン、カルパントラ、カヴァイヨン、リル＝シュル＝ラ・ソルグという4都市には、〈カリエール〉というユダヤ人地区が存在し、アルマン・リュネルによると、それ



らは「それぞれ自分たちのシナゴグをもち、その信者たちの目には、彼らの熱情にとっては、エルサレム、ヘブロン、サフェド、ティベリアスの四聖共同体の思い出に連なる、コンタ・ヴェネサンの四聖共同体を神秘的に形成していたのであった。」(Lunel Juifs 76)

「私たちはエグザイルにあり、“来年はエルサレムで”とずっと唱えてきまし

た。」私がアヴィニョンのシナゴグを訪れた際、責任者の一人はこう語った。<sup>2)</sup> かつての〈教皇のユダヤ人〉もきっと同じようであったのであろう。しかし21世紀の現在、ユダヤ人国家が存在し、そこへはわずか4時間程度のフライトで降り立てる。ディアスポラの意味も異なるのではないか。あなたは、このユダヤ人をどのように定義しますか。「カトリックのフランス人やムスリムのフランス人がいるように、私たちはイスラエリットのフランス人です。」シナゴグの壁には、20世紀の二つの世界大戦で亡くなったユダヤ人の名前が掲げられている。血税の証しを示すこの戦没者プレートと、「イスラエリットのフランス人」という答えはぴたりと一致する。〈解放〉後進んだフランス社会への同化過程の中で広まったユダヤ人意識である。これは〈教皇のユダヤ人〉の知らないものである。

アヴィニョンの最初のシナゴグは現在の場所にはなく、巨大な教皇庁のすぐ前、有名な橋が途中で途切れているローヌ河岸に出られる坂の途中にあった。「旧ユダヤ街通り」という名前にしかその名残りをとどめていないが、この位置は興味深い。同じことは、ローヌ河をやや下ったところにあるタラスコンの町のユダヤ人地区にも言える。河畔にそびえるルネ・ダンジュ(15世紀末に亡

くなると、その領地はフランス王国に編入された)の堅牢な城砦の足元、堀にかかる石橋を出たすぐのところに、かつてユダヤ人居住地区はあった。ここでも現在は「ユダヤ人通り」などの地名と、入り組んだ路地に往時が偲ばれるだけであるが、この位置関係は、アヴィニヨンの場合と同様、ユダヤ人と権力者



の関係を端的に可視化してくれている。それは、「依存、庇護、分離という、鍵となる三要素の巧みな調合」(Iancu *Être Juif* 32-33)である。ユダヤ人は、聖であれ俗であれ主権者に依存し、多様な貢献をする見返りに庇護を受けたが、他の住民とは分離させられた。ユダヤ人居住地区が城砦や宮殿に近接し

ていることは、ユダヤ人にとっては、キリスト教徒に襲撃された時、支配者にとっては、ユダヤ人の動静をつぶさに監視し、ひそかにおねだりをする場合に便利であったであろう。(上の写真は、ルネ城砦から見下ろした旧ユダヤ人街)。

ルネの庇護のもと、ユダヤ人は多様な職業に従事できたし、土地所有者にもなれた。とりわけ、服飾や室内装飾など布地に関わる業種は「ユダヤ人職業」とよべるほど専門化していたという (Iancu *Être juif* 62)。<sup>3)</sup> ルネは強制的改宗を禁じ、自発的な改宗を促した。富裕なユダヤ人は改宗を選び、その中には貴族化した人々も少なくない。ダニエル・イヤンキュは、同じ時代のイベリア半島と対比してこう書いている。「「疑わしい心」をもったスペインやポルトガルのマラーノとは反対に、プロヴァンスの新キリスト教徒は、こうしてユダヤの歴史から身を引いて、プロヴァンス世界の一部となっていた」(Iancu *Être juif* 164)。

それに対し、ルネ時代に対するアルマン・リュネルの評価はあまり高くはない。「ルネよりも自分の土地のユダヤ人に寛大であった主権者はいなかったが、ルネ以上に金を引きだした支配者もいなかった」という歴史家ラウル・ビュスケの評を引いて、この時代は結局のところ「厚遇の絶頂」にすぎないと判断している (Lunel *Juifs* 40)。また改宗についても、複雑な問題を見ている。すでに挙げた『ニコラ・ペッカヴィーカルパントラのドレフェス事件—』の中で主題化したのも、〈解放〉後になっても、〈新キリスト教〉の中で蠢く、その「疑わしい心」の問題であった。

## 2. 〈カリエール〉とシナゴーク

「この町には、現在ではたった3家族のユダヤ人しか残っていません。」宗教マイノリティ研究家のエミリ・アヴレ氏はこう説明しながら、シナゴークの施錠をはずしてくれた。カヴァイオンはヴォクリューズ県にある小都市で、近くには、マルセーユ、アルル、アヴィニョンなど世界中から観光客が押し寄せる都市もあるが、ここはいたって静かである。シナゴークは、現在、博物館（「コンタ・ヴネサン博物館」）となっており、イスラエルから団体に観光客が時々訪れるというが、私の訪れた時は誰もいない。カヴァイオンのユダヤ人家族が宗教祭儀に赴くアヴィニョンのシナゴークや、「南仏の隠れたエルサレム」とかつて呼ばれた（*Lunel Juifs* 78）カルパントラにある、フランス最古の現役シナゴークには訪問者が続いていたのはかなり違う。<sup>4)</sup> シナゴークとしては役割を終えている故に、アヴィニョンのようにキッパを被ることを求められることもなく、しかも、私に好都合だったことに、非ユダヤ人には通常許されない場所にも足を踏み入れることができた。

プロヴァンス語で「通り」を意味する〈カリエール〉（*carrière*）という名で呼ばれたユダヤ人居住区は、かつての姿を彷彿させるように、細道の入り組んだ界限にあるが、アルマン・リュネルは晩年の1975年に出版した『ラングドック、プロヴァンス、及びフランス教皇領のユダヤ人』の中で、その〈ヘブライ通り〉が「清潔で陽が当たっている」ことに驚いている（*Lunel Juifs* 88）。

カヴァイオンに現在残っているシナゴークは、18世紀に作られたもので、かつて〈カリエール〉の出入り口となっていたアーチの上にある（左写真、奥）。キリスト教会が、町や村の中で一人突出して中心性を醸し出しているのはかなり異なっている。それはカルパントラ（次頁写真の中央の建物がシナゴーク）でも同じであり、一般の住宅と変わりがなく。よほど注意していてもその前を通り過ぎてしまうかもしれない。イスラム世界の〈ジンミー〉のように、ここでも目立ってはいけなかったのであろう。ただ、かつ



てカルパントラのユダヤ人地区には、当時としては想像を絶する 11 階建ての建



物があつたという。平面的に居住地を拡張することを許されなかったユダヤ人は「自らの道を垂直に開き、天によじ登っていた」。(Lunel Juifs 79-80)

カヴァイヨンのシナゴークは二階構造になっている。祭儀が行われるのは上階で、下は女性たちの場所である。

祭儀の場所には女性はいれない。扉の外に集められたり、パリのように上の回廊席から観客のように立ち合わせたりするのを知っていたが、カヴァイヨンの女性たちは天井から聞こえてくる声に耳をひそめていた。また、そこには竈もしつらえられていて、種なしパンを焼くこともできた。

祈りの部屋に入って驚くのは、その明るさである。華やいだ感じさえする。フランスのキリスト教会内部は、例えばステンドグラスで有名なシャルトルのカテドラルのように、内部は昼なお薄暗くひんやりとしている。偶像崇拝を堅く拒否するシナゴークにはモスク同様、キリスト教会にはふつうの絵画も彫像もない。カヴァイヨンのシナゴークの内部の明るさは、何よりも壁面の色合いから来ている。ゴッホのアルルの画の中に見られるような色彩が使われている。印象に残ったのは、サーモンピンクである。恐らく、祈りの場所に予期していた色とはややそぐわない感じがした、その意外な印象のために私の記憶は占有されたのかもしれない。アヴレ氏は「プロヴァンスの色」と解説してくれた。イスラエルからの観光客の中には、この色に、また、女性が解説するのに戸惑う人もいるという。それはいずれにしても、周囲のフランス王国から追放され、絶海の孤島のように残ったこの教皇領で、南仏に溶け込んだユダヤ人の心を、この「プロヴァンスの色」は映し出しているのであろうか。

ラビの立つ演台は両側から階段で登るようになっている。(教皇のユダヤ人)のシナゴーク特徴であり、他の地域には見られないという。キリスト教会を思わせる。まさにキリスト教会のように作られたのである。古着商、古物商、高利貸しという三つの職業しか許されなかったユダヤ人住民の中に、建築師はもちろん、石工も大工もない。ユダヤ人はすべてキリスト教徒のこれらの職業者に依存するほかはなかった。策意的なのか、それしかできなかったのか、そ

れとも、そういう希望をユダヤ人側が出したのか。いずれにしても、ここのユダヤ教会堂は、ここのキリスト教施設とよく似ている。アルマン・リュネルは、当時この地域に流行していた宗教芸術を受け入れたものとして、コンタ・ヴネサンのユダヤ人の特徴を認めている (Lunel *Juifs* 90)。

### 3. アウグスティヌスのユダヤ人論の問題

ローマ教皇庁はほとんどの時期、直轄領内からユダヤ人を追放することなく庇護を続けた。このことは、中世西欧においてキリスト教的な反ユダヤ主義が根強かったことと矛盾するようであるが、教皇庁の基本的な態度は、「貶めながらも間違いなく保存する」(ポリアコフ 364) という一種のアンビヴァレントなものであった。これはアルマン・リュネルも『ラングドック、プロヴァンス、及びフランス教皇領のユダヤ人』の中で指摘するように、聖アウグスティヌスの教理から来ている (Lunel *Juifs* 11)。その「見えないものへの信仰」によると、ユダヤ人は聖典を伝えてきた民として存在理由をもつが、同時にまた、キリストを信じない故に哀れな状態に留め置かれなければならない。<sup>5)</sup> 「ローマは、ヨーロッパの数ある大都市のなかでもユダヤ人追放が一度も実施されたことのない唯一の場所であり、ユダヤ人にとってはまさに平和のオアシスであり続けた」(ポリアコフ 364)。このポリアコフのローマ評は、同じく教皇庁の直轄領であったアヴィニオン等にとっても幾分かは当てはまるものであったろう。

ところで、「貶めながらも間違いなく保存する」という原則は、〈神殺し〉の民という、キリスト教的反ユダヤ主義の核にある告発と決して無関係ではない。例えば、教皇権力全盛時代のインノケンティウス3世はある手紙の中でこう述べている。

神はカインを地上の彷徨人、逃亡者になさった。その時、神は、誰かがカインを殺したりすることのないようにと、彼に徴をお付けになり、その頭を震わせたもうたのです。同じように、キリストの血の告発を受けているユダヤ人も、たしかにキリスト教徒の民が神の〈律法〉を忘れることのないようにするために断じて殺されてはならないのですが、彼らもまた、その心が恥辱に満たされる時まで、彼らの方からわれらが主たるイエス・キリストの名を探し求めるにいたるまで、地上の彷徨人であり続けなければならないのです。(ポリアコフ 367)

〈神殺し〉という広く行き渡ったユダヤ人断罪は、「貶めながらも間違いなく保存する」という原則を通り、自発的改宗という最終段階に行き着いている。

「平和のオアシス」は一時のもので、ユダヤ人はそこで重荷をおろせたわけではない。「墮落した民の永遠の隷属の名においてキリスト教徒とユダヤ人を分離せねばならない。」これが全体としての歴代教皇の意向であり(ポリアコフ 366)、ラテラノ公会議においてユダヤ人に特別な徽章をつけることが強制されたのも、ローマのユダヤ人が「囲い地」に強制移住させられたのも、南仏のユダヤ人が〈カリエール〉に集住させられたのも、すべてその帰結に過ぎないのである。

#### 4. 聖なる共同体

キリスト教側からのこうした、いわば罰としての分離は、ユダヤ人にとっては必ずしも否定的な事態ではなかったのかもしれない。レヴィ記 17 章-26 章には、神がモーセを通してイスラエルの民に示した様々な掟が記され、「神聖法集」というタイトルが付されている。その中に次のような一節がある。

あなたたちはわたしのものとなり、聖なる者となりなさい。主なるわたしは聖なる者だからである。わたしはあなたたちをわたしのものとするために諸国の民から区別したのである。(レヴィ記 20 章 26 節)

コリナ・クルマはラシの解釈を踏まえて、「他の民族からの分離は、イスラエルが神のものになりうるために必要不可欠な条件である」(Coulmas 3) と説明している。<sup>6)</sup> ユダヤ人が「分離」されてあることは聖性を保証する積極的な存在様式なのである。そして、ユダヤ教独特の多数の細かい戒律も、この第一原理から理解される。それは「理解可能な倫理的行動規則」なのではなく、「神に従う徴、他の民からの分離を示す徴」なのである (Coulmas 3)。従って、「日常のどんな仔細なところまでも規律する法」を生きるために、「共同体の問題に対する外部からのいかなる干渉も排除」することに多大なエネルギーとお金がつぎ込まれ、共同体内部ではこの至上の掟に基づいて、相互扶助と共同責任のシステムが構築されていた (Coulmas 6-7)。<sup>7)</sup>

コリナ・クルマがおおよそ以上のように形づくる中世ユダヤ社会の一般型は、アルマン・リュネルやルネ・ムリナスらの歴史家が一次史料をもとに明らかにしている〈カリエール〉のユダヤ共同体の実態ともよく符合する。キリスト教



側からの強制が〈カリエール〉への集住の直接の原因であったとしても、ユダヤ教側におけるこうした聖性原理とそれに基づく共同体運営の要求が、外からの囲い込みに呼応する、いわば内発的な動因であったと考えられるのである。

分離し自律するユダヤ共同体、〈解放〉が解体したのはこれである。1789年の暮れ、ユダヤ人への人権宣言の適用を危惧する勢力に対して、クレモン＝トネールは、憲法制定議会で次のように演説した。

ネーションとしてのユダヤ人にはすべてを拒絶し、個人としてのユダヤ人にはすべてを許さなければなりません。彼らは、国家の中で、政治体でも宗教体でもあってはならない。彼らは個人として市民でなければならないのであります。

「ネーション」としては解体し「個人」として組み入れる、という同化原則の下で、〈聖なる共同体〉は壊された。そしてその時、上で見たような聖性原理も存在できなくなったことは明らかである。以後ユダヤ人は、トータルな分離を実現する、共同体としての聖性を失って、ユダヤ教は私的領域における信仰、宗教儀礼、行動規範となってしまった。地上世界における自分たちを支配する法はフランス国家の法である。〈解放〉後世界において、ユダヤ人アイデンティティの模索は現在まできわめて豊かな展開を見せている。そしてそこには、ユダヤ教信仰を核に据えるものも見られるが、しかしそれは決して〈解放〉前の、あのトータルな聖性概念に基づく聖なる共同体を生きることとは別物である。この失われた世界への憧憬はコリナ・クルマの論文にも感じられるが、アルマン・リュネルにおいては、ユダヤ人意識の核心に据えられている。

## 5. 失われたユダヤ世界の発見

アルマン・リュネルがエックス＝アン＝プロヴァンスに生まれたのは、〈解放〉後すでに1世紀が経過した時点である。その多くのユダヤ人家族はもはや宗教儀礼にはこだわらず、割礼が唯一の伝統として残っているだけであったという。アルマン自身、ユダヤ教やヘブライ語の教育は全く受けていない。アルマンの父親はユダヤ教に「敵意」さえ抱いており、母親はきわめて敬虔な信者であったが、家の中では夫が不快にならないように、祈祷書さえ引き出しの自分の服の下にしまいこんでいた (*Lunel Les chemins de mon judaïsme* 62)。フランスの19世紀を通して進行した同化過程によって形成された典型的な近代的ユダ

ヤ人家族である。<sup>8)</sup>

アルマンの子供時代は、その同化ユダヤ人の代表的存在であるアルフレッド・ドレフュスの事件が世論を二分していた時代である。反ユダヤ主義的な出来事はこの南部の町にも当然波及していて、アルマン・リュネルの、ユダヤ人という自覚もやはり傷として始まっている (*Lunel Les chemins de mon judaïsme* 59-60)。そしてそのようなユダヤ人意識をもつものとして、アルマン・リュネルは、あの、戦後世代に支持された、ジャン＝ポールサルトルのユダヤ人定義に共感を示している (60-61)。ただしあくまで「部分的に」であり (60)、「外的な」ユダヤ人性に関わることにすぎず、自分がユダヤ人であることを受け入れるには、もっと内側で呼応するものがあつたからであるという (61)。そしてそれが、〈教皇のユダヤ人〉につながる意識なのである。それは一つの失われた世界の発見であつた。正確には、その持続の発見であつた (63-67)。

18世紀末の〈解放〉は、ユダヤ人教徒とキリスト教徒との分離に終止符を打つものであつた。しかし何世紀にもわたる隔離の壁が法的に壊されても、社会の状態も住民の心も一挙に変化するわけではもちろんなかつた。アルマン・リュネルが、『ニコラ・ペッカヴィーカルパントラのドレフュス事件—』等の中で描きだしたのも、〈解放〉後のそういう問題である。改宗のトラウマが富裕な商人を狂気に追いやる。元銀行家が彷徨い続ける。年がら年中戒律に従い、旧〈カリエール〉の家族としか行き来しない女性たちがいる。その中には、モーセと教皇クレメンス6世 (14世紀のアヴィニョン教皇の一人) の肖像を飾って願いを捧げる老婆もある。しかしアルマン・リュネルには、こうしたユダヤ人たちの奇妙な生活の、同化的な世界了解の外にはみ出した部分が次第に見えてくる。

すべてのことに対し、あのように急ぎ、あのように気を配り気を揉み、あえて言えば、到達できないほど完ぺきなまでにあのように心を砕いている。それは根底において日常の身振りに留まらず、地上の物事に収まらず、その物質性を、形而上的に限りなく超えるものであつた。それは永遠なるユダヤ的不安の残存以外の何ものであつたらうか。 (*Lunel Les chemins de mon judaïsme* 78).

母の故郷カルパントラのユダヤ人女性たちのユダヤ教は、決して干からびた形式主義なのではない。〈解放〉の前も後も、家父長的ユダヤ社会において、家でもシナゴグでも常に脇に置かれていた女性たちは、間に合わないことが絶

えず気がかりで、いつでも文字通り走り続けてきた。その日常の動きは、奥底で現在を超えて、〈教皇のユダヤ人〉共同体が求めてきた聖性につながっている。

同化ユダヤ人の子供が、見慣れた風景、日常の生活の中に、その裏側に、あるいは同時並存して、まるで異次元の不可視の世界のように、別な世界があることに気がついた。世界が単数では呼べなくなってしまう。それぞれの人が実は世界の複合性に関わりながら生きているのかもしれない。一次史料の分析ではとらえられない、こうした存在の様態の発見が、アルマン・リュネルのユダヤ人意識の形成には決定的な出来事になっているのである。

## 注

- 1) エステール・ベンバサによれば、アヴィニオンとコンタ・ヴネサンのユダヤ人が、ユダヤ世界で、人口規模にも文化的影響力にも依らない「名声」を享受してきたのは、12世紀から現代までほとんど切れることなくそこに居住し続けてきた故のことであるという (Benbassa 74)。
- 2) 2010年8月、私はアヴィニオン、カルパントラ、カヴァイヨン、リル＝シュル＝ラ・ソルグ及びその周辺地域にある、南仏ユダヤ人の関係施設を調査した。
- 3) タラスコンの旧ユダヤ人地区にある、現在の「エドワール・ミヨー通り」の旧名は「布地通り」で、往時の経済活動を偲ばせる。エドワール・ミヨー (1834-1912) はこの町出身のユダヤ人であり、司法官・政治家として活躍した、19世紀の同化ユダヤ人の代表的な人物である。
- 4) カルパントラのシナゴークは、18世紀につくられた病院とともに町で最も観光客の訪れる記念建造物である (*Le Dauphiné Libéré* 5 août 2010)。
- 5) 『アウグスティヌス著作集』第27巻に収められている「見えないものへの信仰」の訳者解説は、ユダヤ人問題における教父アウグスティヌスの権威については何も触れていない。ユダヤ教とキリスト教の関係が、とりわけショアー以後、西欧では不可避の論争点になっていることを考慮すると、何らかの言及があってもよいのではないかと思う。
- 6) ジュール・イザアクは、同じ一節を「パレスチナの外に散らばったイスラエルの民の精神的根底」と説明している (Isaac 48)。
- 7) もちろん共同体の内部では支配関係が貫徹している。「姻戚関係で結ばれた少数の

特定の諸家族が共同体の実権を握っていた」(Iancu *Être juif* 106)。ユダヤ共同体内部における「マイナー」(minores)と「メジャー」(majores)の対立(Iancu *Être juif* 115)は、聖フランチェスカが〈マイナー〉の立場に就いた、アッシジ社会の対立構図と同じである。

- 8)「聖地から送られた使者たちは、すでに18世紀〈教皇のユダヤ人〉が宗教的な面で放任主義的傾向をもっていることを強調していた」という。恐らく外部的な制約がこれには大きかったのであろう(Benbassa 81)。

## 引用文献

- アウグスティヌス「見えないものへの信仰」茂泉昭男訳、『アウグスティヌス著作集』、第27巻、教文館、2003年。
- ポリアコフ、レオン 『反ユダヤ主義の歴史』第2巻、合田正人訳、筑摩書房、2005年。
- BENBASSA, Esther. *Histoire des Juifs de France*, Seuil, 2000.
- COULMAS, Corinna. «Un peuple saint - Un peuple séparé : la notion de sainteté comme principe d'organisation des communautés juives médiévales», *Actes du colloque Politique et Religion dans le judaïsme moderne*, tenu en Sorbonne les 18 et 19 novembre 1986, publiés aux Presses de l'Université Paris Sorbonne. 本稿の作成にあたっては、以下のサイトを参照した。 <http://www.corinna-coulmas.eu/english/un-peuple-saint-un-peuple-separe.html>
- IANCU, Carol (sous la direction de). *Armand Lunel et les Juifs du Midi*, Sup Exam Éditions, 1986.
- IANCU, Danièle. *Être Juifs en Provence au temps du roi René*, Albin Michel, 1998.
- ISAAC, Jules. *L'enseignement du mépris*, (Fasquell, 1962), Grasset, 2004.
- LUNEL, Armand. *Nicolo-Peccavi ou l'Affaire Dreyfus à Carpentras*, 1926, Gallimard, 1976.
- id. *Juifs du Languedoc, de la Provence et des États français du Pape*, Albin Michel, 1975.
- id. *Les chemins de mon judaïsme*, L'Harmattan, 1993.
- MOULINAS, René. *Les Juifs du Pape*, Albin Michel, 1992.